

## 修辞の可能性 現象の整理と再現について

柴田 佳美

世の中の前提であるようなことに、普段は疑問を持たない。ある時に、歌がその前提自体に視線を向ける。すると、どこかに潜んでいた異世界のような、現実と隣り合わせの謎めいた世界が現れる。

ここでは、短歌の修辞の可能性について考えたい。その前に、興味深い文章があるので先に触れる。『三木清文芸批評集』（講談社文芸文庫）の「レトリックの精神」より引く。

「芸術は具象性をもたねばならぬからといって、現象を無差別に描かねばならぬのでなく、却ってそれを整理し、その間の聯関を認識し、統一して再現しなければならぬ。」では、どのように短歌の中で現象を整理し再現していけばいいだろうか。ひとつの方法として、世の中の前提となるようなことを、作者独特の論理で入れ替えた歌があると思うのだ。

晩夏光おとろへし夕 酔は立てり一本の塚  
の中にて 葛原妙子『葡萄木立』

もし、この一首の中に「不思議なり」といった、作者の感慨を表す言葉があるでしょう。その言葉を加えた途端に作者の存在が顔を出してしまい魅力がなくなる。この歌では、〈私〉の言葉が消え、主体が私から酔に移っている。自発的

な意思をもって酔が立ち上がっているようである。本来酔に意思はない。もちろん立ち上がったりしない。短歌が世の中の前提に触れることで、〈私〉の存在がひどく希薄になった謎めいた世界が現れている。

物事を独特の感性で認識し作者の論理で入れ替え、短歌として再構成している。本稿では、このような歌について考えたい。

\*

葡萄園に胸もと白き少女みてみどりのぶだ  
うみな熱れいそぐ 影山一男『天の葉脈』

美しく印象深く葡萄をうたっている。葡萄がまだ熟れきっていない季節であることから夏であろう。少女が葡萄園にいる。夏は薄着であることが多い。おそらく少女は胸元が涼しげに開いた服を着ている。「胸もと白き」と清楚な少女の美を色で表現しているが、匂いやかなふくらかさにも読者は思い至る。少女の存在は葡萄が熟れる原因にはならない。しかし、作者は少女と葡萄という具象を芸術作品として短歌の形に再構成するときに、独特の感性で捉え新しい論理を築いている。

続いて、もう少し歌を見たい。

月しろの縁明るめり鳥のこゑ樹に蔵はれて  
夜の闇ふかく 影山一男『天の葉脈』

薄荷飴喉にし沁めば今日つきし小さき嘘の  
よみがへり来る 桑原正紀『火の陰翳』

鶴首に挿しし水仙いちりんがねむりたるら  
しことりかたむく 桑原正紀『花西行』

咲きましたさくらの花が咲きました生きよ  
生きたき者よ生きよと 狩野一男『悲しい滝』

こんな夢われのゆめではありません どう  
も枕が見てゐるユメだ

宮里信輝『デーモンの心臓』  
春といふ字を二十ほど書いてごらん雪解け

水の音がするから 福士りか『サント・ネージュ』  
いち日はゆつくりと過ぎ一年はすばやく過

ぎて十年は瞬 黒岡美江子『竜神さまの雲』  
春になり物差しもわずか伸びていん本にあ

て本の束を測りぬ 花山周子『林立』  
一首目、叙景の中に樹が声を蔵うという独特の認識を潜ま

せている。自然のスケールの大きさと荘厳さを見事に深め表  
現する。二首目、薄荷飴が過去を回想する入り口になってい

る。薄荷飴の具体は読者に想像力を発動させる役割も担う。  
四首目、桜の花が作者を励ます。力強く、花が繰り返し話し

かける。桜が言葉を話す世界は作者だけでなく読み手にまで  
広がる。表現に込められた人生のメッセージが印象深い。五

首目、通常枕は夢を見ない。枕のユメとすることで、夢の混  
沌とした展開を表現している。六首目、字を書く作業と雪解  
け水の音がすることは、ふつう原因と結果にならない。春の  
字に誘われ、謎めいた世界に連れて行かれる。七首目、実感  
する時の長さは、実際の時の長さとは異なる。時間感覚の不思議さを、言い切る文体で鮮やかに表現する。八首目、草木の伸びる春、物差しまで伸びる。独特の発想をすることで、春の持つ力のイメージを導き出している。

遠い春湖に沈みしみづからに祭りの笛を吹  
いて逢ひにゆく 斎藤史『魚歌』

謎めいた世界を持つ歌を読み解く上で手がかりにしたい鑑賞がある。高野公彦『わが秀歌鑑賞 歌の光彩のほとり』

(角川学芸出版)より、右の歌の鑑賞の一部を引く。「奇想であると同時に、きはめて浪漫的な発想である。笛を吹きながら湖底に向かつて沈んでゆく女人、といふイメージが美しい。例へば薬師寺東塔の頂きにある水煙の中に、横笛を吹く天人がある。あれに似た優美なイメージである。」奇想な発想と女人のイメージを言う。さらにこう文章が続く。「失はれた自分の内なる少女、過ぎ去つた歲月、さういつたものを惜しみつつ、作者は自分の創り出した静謐で華麗な空間に心を遊ばせてゐるのだ。」まことにそのとおりだと思う。斎藤史は「歲月」を惜しみ、創り出した「空間」に心を遊ばせている。さらに、私は笛の音が異世界に読者を導く役割を担っているように思う。この鑑賞を道標に、本論で挙げている歌の世界に惹かれる理由を考えたい。

## 『歲月、時間』

歌の中で〈私〉は時間の楔のような役割を果たす。〈私〉が歌の中にいる。すると、その人物の今・未来・過去と想像上の時間に歌が存在する。「われ」「わたし」など主体を表す語がなくても、主語は私と推定される場合が多い。読者は補完して読む。しかし、歌から現実的な〈私〉の陰が薄まると、歌は時間の楔から解放される。

かなかなのこゑは世界が反転をはじめめる合

図いまでもむかしも

桑原正紀『花西行』

「世界が反転をはじめめる」と鮮やかにうたう詩情豊かな作品。感慨と説明的要素を抑え、感覚的に律動的に表現する。洗練された世界が読者を引きつける。おそらく夏の朝か夕方であり、作者にとっての今と昔と読める。記録的な要素を薄めていることで、作者の出来事としてよりも幅広く、読者の想像が膨らむ。「かなかなのこゑ」は具体を超えて読み手の中にあるそれぞれの夏の朝夕のイメージを喚起させている。こうして現れた普遍的なイメージ。これに導かれ「むかし」は一人の人生における時間の楔から解放される。長い歲月を連想させる。感慨をそのまま詠むのではなく、このように心の深いところに潜んでいるものを独自の手法で再現する。すると、作品に普遍的な時間が流れはじめ歌が深まる。ここに魅力がある。

## 『空間』

本来空間はどこまでも続く。歌に〈私〉が存在すれば空間

はその人物から見た世界になる。こう考えると歌の空間は私前提の限られた空間だ。

みづからの広さに耐へてゐる空のこぼすひ

とつのなみだか鷹は

渡辺松男『雨る』

空が自らの広さに耐えていると仮定したとき、鷹は空の涙のようだという歌意であろう。この歌の中で空は実に広そうだ。叙述と私の気持ちの説明が控えられている。人間の存在が希薄になり、空が人間の視野に収まる範囲を超えて想像されるからだろう。そのような広い空間がこの歌には創り出されている。空間は私から自由の身となり、私の存在よりも先行している。リアリズムをはなれた広がりのはろはろしさが生まれている。その奥に潜む作者の感情の提示に惹かれるのだ。

## 『主観と普遍、そこそこ』

心の中に抱く美しさなどの感覚とその状況に出会ったときの感慨は、人それぞれだ。歌の中で説明できたとしても共感を押し付けることはできない。個人的な感動を、歌の中で説明をするとしよう。状況理解と共感を求めているような印象になってしまう場合がある。そのため、すつきりしない散漫な歌になると思うのだ。ではどのように、個人的な感動を説明的にならずに伝えられるのだろうか。

水底にしんとしづまる桜森のぞけばしんと

のぞかれてをり 福士りか『サント・ネージュ』

桜の森の持つ生命感と、水の透明感のイメージが実に美しい。しかし、実際に水底に桜の森があることはないし桜が人

を見ることもないだろう。「そのように見えた。そのような気がする」という説明を省いている。そして実世界と違う論理が存在する世界を創り出して桜と水の具象を再現している。その世界に心を遊ばせているのだ。一番作者が感動したであろう、美しさと透明感の説明は抑えている。

自分に身近なものを好ましく思う心があると思う。作者自身を強く感じる歌の場合、読者にとって場面は「そこ」である。どんなに説明されようとも歌を遠巻きに見ている状態だ。しかしいったん作者から離れた歌は読者にとってもはや「そこ」でない。身に引き寄せて「ここ」として捉える。歌の場面に接近して歌の中を歩き始める。読者は身に引き寄せて桜と水を思う。そして多くの感覚や感情が想像され膨らむのである。美の感覚を説明するのではなく、いったん作者の主観から歌を放し普遍的な美を感じる世界を作り上げる。これが、読者に強い反応を呼び起こし、結果的に作者の感情を伝えることができるひとつの方法だと思ふ。

### 『オノマトペ』

先に挙げた斎藤史の歌の中で、笛の音が異世界に読者を導く役割を担っているように思うと述べた。そのような力が、オノマトペにもあると思ふ。

闇が息をしてゐる 死者が息をしてゐる  
ふはーッ ふはーッと停電がくる

渡辺松男『雨る』

歌意は、「何か心配がする。闇が息をしているように感じる。それは死者の息のように生命感のない不気味なものだ。

その闇の中停電が来る。停電は恐ろしいげな声を出す魔物のようだ。」ということであろう。本来、闇や死者は息をしない。停電が生き物のような声を立ててやってくることもない。作者は余計な説明要素を詰め込まず、あり得ないことを言い放つ。こうしてしっかりと読者に不気味さを伝えている。「ふはーッ ふはーッ」のオノマトペは実に新鮮だ。停電には声がないのであるが、停電を擬人化し独創性のあるオノマトペを用いている。独創性があるオノマトペには、作者が創り出した世界に読者を誘い込む力がある。このようなオノマトペが導く世界を感じられる歌を次に挙げる。

はばからずああああああああと啼く  
春日かすがの杜の古鴉啼く

安立スハル『安立スハル全歌集』

しゆわしゆわと馬が尾を振る馬として在る  
寂しさに耐ふる如くに 杜沢光一郎『黙唱』  
しゆるしゆしゆしゆ隅田川辺に花火咲く下  
にねむれる空襲の死者 影山一男『若夏』

\*

読者の感覚に働きかける、説明を省いたり論理を入れ替える実験的な修辞の試み。現象を整理して新しい世界に再現する創造性に、私は可能性を感じる。作者の表現したいものはっきりしていなければ、読者はついて行けない。そして訳の分からぬ歌になり、この方法は成功しないだろう。既製の枠にとらわれず、核となるイメージから真摯に新しい世界を創り上げようとする。そのエネルギーに私は惹かれるのだ。